彼女こゝに眠る

若杉鳥子

青空文庫

その夜の月は、紺碧の空の幕からくり抜いたやうに鮮やかだつた。
夜露に濡れた草が、地上に盛り溢れさうな勢ひで、野を埋めてゐた。
『お歸んなさい、歸つて下さい。』
『いえ。私はもう歸らないつもりです。』
『どこまでひとを困らせようといふんです。あなただつて子供ぢやあるまいし。』
草の中に半身を沒して、二人はいひ爭つてゐた。男は激しく何かいひながら、搖すぶるやうに女の肩を幾度も小突いた。
『いえ、私はあなたが何と仰有つても、あなたに隨いてゆくのです。それより他に私の行くみちはないんです。』
女は嶮しい男の眼を眼鏡の中に見つめながらいふのだつた。
『馬鹿なツ、隨いてゆくつたつて、何處へ行くといふんです。』
『何處までゝも——けれど、それがもしあなたの御迷惑になるとでも仰有るなら、私は此處でお訣れします。でも、家へはもう歸らない覺悟です。』
女は少し冷やかにいひ放つと、蒼ざめて俯向いた。二人の間に、暫く沈默が續いた。
默つて女を凝視してゐた男は、前とは全然異つた柔しさでいつた。
『ね、解つて下さい。僕は堺さへ持つてゐない、浮浪人に等しい男なんですよ。』

『知つてます、そんなこと。』
『それにです、明日どうなるかも解らない體なんです。』
『みんな、よく私は解つてゐるんです。』
『今夜あなたのお父さんが、僕を罵倒して追ひ出したのも、親として無理なことではありません。全く僕といふ男は、あなたを何ひとつ幸福にしてあげる事なんかできない人間なんですから……』
『ぢやあ、あなたは私を輕蔑してらつしやるんだ。』
『なにいつてるんですツ』
『だつてあなたは、私がやつぱし、父のいふ意味の幸福な結婚を求め、さうしてまた、それに滿足して生きてられる女だとしか思つてない……』
『さうぢやない、さうぢやないが……』
『いえ、あなたは、私といふ女が、あなたの足手纏ひになる厄介な女だと思つて、その癖に今まで……』
『昂奮しないでお聽きなさいツ。ではこれから自分達の行く道が、どんなに嶮しい、文字通りの荊棘の道だつてことが、生々しい現實として、お嬢さん、ほんとにあなたにわかつてゐるんですか……』
彼等の爭ひは、際限もなく續いた。さうして夜が更けて行つた。

……だがその夜始めて、彼女は戀人の激しい熱情に身を投じたのだつた。

彼女が、戀人の片山と一緒に生活したのは、僅かに三ヶ月ばかりだつた。彼がその屬してゐる黨の指令のもとに、ある地方へ派遣された後、彼等は滅多に逢ふ機會もなかつた。その間彼女は、無産者××同盟の支部で働く傍、あるデパート專屬の刺繍工場に通つて生活を支へた。そのうち、三・一五事件として有名な、日本××員の全國的の大檢擧が行はれた。それ以來、片山の消息は知れなくなつた。

彼女は、片山一人を得る爲には、過去の一切を棄てた。肉親とも絶たなければならなかつた。もつとも、母親は實母ではなかつた。

唯一人、賴みとする片山に訣れた彼女は、全く淋しい身の上だつた。彼女は、片山の同志のK氏の家に身を寄せて、彼の居所を搜してゐたが、その彼が、I刑務所の未決監にゐると判つたのは、行方不明になつてから、半年もの後だつた。

それから彼女は毎晩、惡夢を見た。片山が後手に縛り上げられて上から吊るされてゐる、拷問の夢である。

ある時は、隣室に臥てゐるKの夫人に搖り起されて眼を覺ましたが、彼女にはそれが單に夢とばかり、打ち消すことができなかつた。何故なら、その頃、さういふ野蠻な戰慄すべき噂が、世間に喧しく傳はつてゐたからだ。

彼女は毎晩ぐつしよりと、寝汗をかいて眼をさました。寝巻は濡れ紙のやうに膚にへばりついてゐた。

その日も、朝早く彼女は起き上らうとしたが、自分にどう鞭うつて見ても、全身のひだるさには勝てなかつた。立ち上ると激しい眩暈がした。周圍がシーンとして物音がきこえなくなつた。體はエレベーターのやうに、地下へ地下へと降下してゆくやうな氣持だつた。そして遂に彼女は意識を失つて了つた。

間もなく、K夫人は間の襖を開けて吃驚した。瞬間、自殺かと狼狽した程、彼女は多量の咯血の中にのめつてゐた。

然し、夫人は氣を鎭めて、近くにゐる同志の婦人達を招び集めた。近所から醫師も來て、兎も角應急手當が施された。

病氣は　急激性肺勞（ギヤロツピングコンザンプション）と診斷された。

然しその時の周圍の事情は、病人をK氏の家に臥かして置く事を許さないので、直ぐに何處へか入院させなければならなかつた。

だが、入院するとしても、誰一人入院料などを持合してゐる筈がないので、施療患者を扱ふ病院へ入れるより仕方がなかつた。處で一番先に、市の結核療養所へ交涉して見たが、寄留屆がしてないので駄目だつた。そのうちにも、病人の容態は、刻々險惡になつてゆくので、たうとう、そこから餘り遠くない、府下××村のH病院へ入院させるより仕方がなくなつた。

それはキリスト教の教會の附屬病院なので、その事に就いては、大分異議を持出した者もあつたが、この場合一刻も、病人を見過して置く事はできなかつた。さうして彼女は何も知らずに、婦人達に見守られながら、靜かに寢臺車で搬ばれた。

冷氣は酢のやうに彼女の體を浸してゐた。

硝子戸の外には秋風が吹いて、木の葉が水底の魚のやうに、さむ〳〵〳〵と光つてゐた。

此處はどこなのかしら——彼女は起き上らうと意識の中では藻掻いたが、體は自由にならなかつた。

西の空はいま、血みどろな沼のやうに、まつ紅な夕やけに爛れてゐた。K夫人は立つて西窓のカーテンを引いた。

病人は不安な眼を室内に漂はしてゐたが、何か物をいひたさうに、K夫人の動く方を眼で追つてゐた。

『あなたはいま重態なんですから、お氣をおちつけて、靜かにしてゐなければいけませんのよ、此處？　此處ですか……』

K夫人はいひ澁つたが、氣の毒さうに病人を見ていふのだつた。

『此處は、御存じでせう、ほら××村のH病院ですのよ。それは宗教の病院になんか、あなたをお入れしたくなかつたんですけれど、差し迫つた事ではあるし、經濟的にどうにもならな

かつたもんですからね、全く仕方のないことでした。』

病人はK夫人の顔の下で、小兒のやうに顎で頷いて見せた。上の方へ一束にした髪が、彼女を一層少女らしく痛々しく見せた。

K夫人は病人の耳もとに口を寄せて囁くやうにたづねた。

『遠くにゐる方で、お逢ひになりたい方もありませう？』

彼女は默つて首を振つた。その眼には涙がいつぱいに溜つた。

『でも、知らしてだけは置く方が好いんですのよ、來ようと思ふ氣持がありさへしたら、すぐに來てくれるかもしれませんからね、ね、電報を打ちませうね？』

K夫人の言葉に、病人は感謝するやうに、素直に頷いた。

隣室には、Aの夫人、Cの母堂、若いTの夫人等が集つてゐた。病室の方での忙しさうな醫員や看護婦の動作、白い服の擦音、それらは一々病人の容態のたゞならぬ事を、隣室に傳へた。

そこへ今朝、片山の假出獄を頼む爲に辯護士の處へ出かけて行つたK氏が戻つて來た。疲勞と睡眠不足とに、K氏は蒼ざめて髭さへ伸ばしてゐた。

『どうも困つちやつたんです。』

K氏は婦人達を見るなりさういつた。

『片山さんのことですか？』

『それもどうも望みはないらしいですがね、それよりも金の事ですよ。先刻、僕が此處へ入らうとすると、例のあの牧師上りの會計の老爺が呼び止めるのです。それから事務所へ行つて今までゐたんですが、施療は村役場の證明書のない患者には絶對にできない規定だといふんです。だから十日分の入院料を前金で即時に納めろといふんです。だが、ないものは拂へないからそこは宗教の力で、何とか便宜を計つてはくれまいかと嘆願して見たんですが、彼奴はどうして、規定は規定だから、證明書もなく金もないなら、すぐに病人を連れてゆけつて酷い事をぬかしやがる、此方もつい嚇として呶鳴つて來ちやつたんですが……』

『だうりで先刻から幾度も、證明書お持ちですかつて、婦長さんが顏を出しました。』

『十日分の入院料を前金で納めろですつて、今日明日にも知れない重態な病人だのに——ほんとに、キリスト樣の病院だなんて、何處に街の病院と異ふ處があるんだ。』

Cの母堂まで憤慨した。

K氏はすぐに、村役場へ證明書を貰ひに出て行つたが、失望して歸つて來た。證明書なるものが下附されるには、十日かゝるか二十日かゝるか、解らないといふ事だつた。事態はそんなものを待つてはゐられなかつた。

その朝は、もう病人の爪先を紫色に染めて、來てしまつた。

彼女は、生命の灯の、消える前の明るさで、めづらしくK夫人に話しかけた。

『Kのおくさん、私はいま何て幸福――』

『え、幸福？』夫人も微笑を返した。

『私はかうして皆さんに圍まれてゐると、氣持の好いサナトリウムにでも來てゐるやうですよ、私達の爲にも、病院やサナトリウムが設備されてゐたら、此間亡くなつたSさんなんか、屹度また、健康になれたんでせうにね。』

Sとは、極度に切り詰めた生活をして、獻身的に運動をしてゐた、若い一人の鬪士だつた。

『今日は脚から、ずん〳〵冷たくなつてゆくのが自分にも解るんです。私も矢つ張りあのSさんのやうに皆さんにもうお訣れです、でもね私は今、大きな大きな丘陵のやうに、安心して横たはつてゐますのよ。』

夫人も涙の眼で頷いた。

それが彼女の最期の言葉だつた。

證明書とか、寄留届とか、入院料とか、さうした鎖に取り巻かれてゐる事を、彼女は少しも知らなかつたのである。

幾回ものカンフル注射が施されて、皆は彼女の身内の者が、一人でも來てくれる事を待ち望んでゐたが、電報を打つたにも拘らず、誰一人、たうとう來なかつた。

秋の日が暮れた。彼女の屍體は白布に掩はれて、その夜屍室に搬ばれた。

そして病院がいふには、入院料を持つて來ない限り、決して屍體は渡さないと。

それが宗教の病院だつた。

翌日、同志達は皆から醵金した入院料を持つて、彼女の屍體を受け取りに來た。すると、黒衣の坊さん達が、彼女の周圍を取り捲いたが、K氏は斷然それを拒絶した。

怜悧な快活な、大きい眼を持つてゐた美しい彼女、今は一人の女として力限り闘つた。

そして遂に安らかに睡つた。

青空文庫情報

底本：「若草6巻2号」宝文館
1930（昭和5）年2月1日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：林幸雄
校正：大野裕
2001年1月17日公開
2013年10月8日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

彼女こゝに眠る

若杉鳥子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/